

2016年03月08日

安藤健二 アンソニズム  
kenji.ando@huffingtonpost.jp

## 石巻のタクシー運転手は、なぜ幽霊を見たのか？ 工藤優花さんが語る被災地の「グレーゾーン」

投稿日: 2016年03月08日 13時00分 JST | 更新: 19分前

### ■「私は死んだのですか？」と言った直後に姿を消した女性

東日本大震災から3カ月ほどたった、ある深夜の出来事だった。タクシー運転手の男性がJR石巻駅（宮城県石巻市）の近くで客を待っていると、もう初夏だというのに、真冬のようなふかふかのコートを着た30代くらいの女性が乗車した。

目的地を聞くと「南浜まで」と一言。震災の津波で、壊滅的な被害を受けた地区だった。運転手は不審に思って「あそこはもうほとんど更地ですけど構いませんか？」と聞いた。すると女性は説える声で答えた。「私は死んだのですか？」。運転手が慌てて後部座席を確認すると、そこには誰も座っていたなかった。

これは怪談ではない。1月末に発売された「呼び覚まされる霊性の震災史」（新報社）に収録された女子大生の卒論に書かれている内容だ。東北学院大学教養学部4年生の工藤優花（くどう・ゆか）さん（22）は、震災の死者数が約3500人と最多となった宮城県石巻市の人々に「幽霊を見た経験がないか？」と聞いて回る実地調査をした。

どうして彼女は「震災と幽霊」という特異なテーマを卒論に選んだのだろうか。

### ■「不謹慎だ！」石巻で怒鳴られ続けた日々



インタビューに応じる工藤優花さん

3月5日、仙台市内のキャンパスを訪れて卒業間近の工藤さんに詳しい話を聞いた。現在は金融機関に就職が内定しており、東京と仙台を往復する忙しい日々を過ごしているインタビューだった。

### —なぜ卒論に幽霊の話を選んだのでしょうか？

「高校生の頃から輪廻転生の考えなど、「亡くなった人はどうなるんだろう」ということに興味がありました。それで、大学3年生になったとき金栗清（かねびし・きよし）先生のゼミに入って与えられたテーマが震災死で、テーマ選びに先立って、気になる記事を、新聞や論文から探してくるようになったんです。そのときに地元紙に「亡くなった方の気配がする」という小さな記事が載っているのを見つけました。金栗先生も以前、テーマのサンプルとして「墓だったり埋葬だったり幽霊もあるよね……」と以前に言っていたのを思い出して、それで決めました」

### —石巻で調べようと思った理由は？

「期間も1年と限られているので、絶対数が多いところに行こうと思って、ネットで調べてみると、石巻の地名がよく華がっているように思えたんです。石巻だったら、仙台まで電車で一日で戻って来られるなと思って、場所を石巻に絞りました」

### —しかし、よそ者の女子大生がいきなり「幽霊見ました？」と聞いても、なかなか話してくれなかったのでは……

「私はフィールドワークの経験が皆無だったので、最初はファイルとペンを持っていきなり「幽霊のような不思議な体験をしたことありますか？」って直球で聞いて回っていました。案の定、スルーだったり、ちゃかされたり……。大半は怒られましたね。「不謹慎だ！」「被災があったの分かって来てんだろ！」「お前、身内に亡くなった人がいて、そんなことを聞かれたら普通でいられるか？」って怒鳴られました。それでやり方を变えなくちゃと思ったんです」

### —どのように変えたんですか？

「自分のスタンスを「石巻に遊びに来た1人の大学生」にしたんです。まずは自分を知ってもらうことが大事だと思って、「石巻が好きで来たんで、石巻のことをいろいろ教えてください」という風に話しかけるようにしたんです。友人から羊を借りて海岸沿いで釣りをしているおじさんに混ざってもらって、一日、釣りで終わった日がザラにありました」

「次はいつ来ますか？」と声をかけて、その導入で一日釣りで終わったということもありました。海鮮丼を食べれる食堂で、そこに集まっているおばちゃんとか地域の人の混ざってもらって話を聞いて、一日が終わったり、幽霊のことを聞かなくて終わった日の方が多かったです」

### —そうやって相手の懐に入っていたんですね。この手法は自分で考えたんですか？

「はい。私がおもともと音楽をやっていて、仙台の街中でギターの弾き語りしていたことがあったんです。それで友達でできた経験があったんで、そこからのインスピレーションはあったかもしれないですね。実際に石巻にギターを持って駅前で弾き語りをして、地元の人と場所の取り合いになったこともありました（苦笑）」

### —どんな風に相手から聞き出しましたか？

「経験して終わったのはほとんどですが、話が盛り上がってきたあたりで『そういえばこんな話もありますよーね』と、すっと投げ込んだりしました。ただ、なかなかみんな話たがらないんですよ。確かに、もし私が身内を亡くしたときにガツガツこれらたら言いたくないなと思いましたね。それと同じかなあと思いました」

### —それだけ苦労したときにテーマ変えようとは思わなかったんですか？

「テーマを変えようと思ったし、100回くらい悩もうと思った。でも、被災地で一番問題視されているのは、踏み込んでおいて途中で投げ出す「壁紙」って人たちがいるんです。ボランティアだったり、NPOに学生で所属して、休学してまで力を入れていたのに、途中で投げ出して大学に戻る人がいて、かなり腫がれていました。震災の調査をやる前から、それは『ダメでしょ』と思っていました。また、自分のスタンスとして、途中で諦めるのって良くないなと思ってたので、まずはできるところまでやってみようと思っていました」

### ■タクシー運転手が「ブラックスワン」だった



JR石巻駅前を待つタクシーの行列（3月6日撮影）

2014年3～4月ごろから1年間、工藤さんは足繁く石巻に通った。前半の半年間は一般人を対象に幅広く調査した。「観光に来た大学生のふりをやる」作戦が成功して、多くの人と会話できるようになったものの、なかなか証言は集まらなかった。

### —それまで石巻の全体が対象だったのを、タクシー運転手に狙った理由は？

「調査から半年たったころに、先生から示唆があったんです。社会学のスタンスとして、（白鳥の群れから黒い個体を見つけることになぞらえて）ありふれた事例から特別な「ブラック・スワン」を見つける必要があったんです。金栗先生が「タクシー運転手の件って、すごくリアリティがあるよね」って言ってくれて、それでタクシー運転手がブラック・スワンなのかもしれないって絞り下げていきました」

### —タクシー運転手以外では、具体的にない目撃談が多かったようですね



インタビューに答える工藤花さん

工藤さんは秋田県出身で、大学入学までは秋田市内の高校に通っていた。周りに被災者と呼べる人はいなかったという。

---卒論を書いたことで心境が変化しましたか？

「私も以前は、被災者の人たちを『みんな下を向いているような傷ついている』といったステレオタイプな見方をしていました。でも、実際に石巻を調査して何回も足を運んでいくと、前を向き出している人も結構いたんです。もっと調査していったら、その間にグレーゾーンの人たちがいることに気づきました。『立ち直ろうと思って行動は起こしているんだけど、心が遠いつかない』と言っている人たちがいます。」

震災から立ち直るにも、個人差があります。月日が経つにつれて、その差がやっぱり出てくると思うんですけど、月日が経てば経つほど、このグレーゾーンの人が増えると思うので、そうした人々に焦点を当ててみることは社会全体で必要なんじゃないかと思うようになりました。そのグレーゾーンの人たちにフォーカスを当てているような対策やボランティアって、実は少ないので、

---崩壊現象そのものが、グレーゾーンの象徴とも言えるのでは？

「はい、どちらかというと、グレーゾーンの人たちが崩壊を見ているのかなと思っています。下を向いている人は、自分で精一杯なので、崩壊を見る余裕もないと思うんですよ。逆に前を向いている人たちは、自らを奮い立たせて立ち直ろうとしているから、崩壊を見るような心の隙間はないのかなって思います。そのどちらでもない『グレーゾーンの人たちがいる』と気づききっかけに、この本がなればいいなと思っています。」

【関連記事】

- [大田小学校の校舎、保存か解体か、調査く最終、そして卒業生たちは住民集会に乗り込んだ【発言全文】](#)
- [X JAPAN、約束の地「行啓」から世界ツアー開始](#)
- [【ダンボールゴースト】段ボール製スーパーカーが本物と共演、震災復興した商店街の目玉に](#)

▼クリックすると画像集が開きます▼

震災から5年目の行啓市



Kenji Ando



いいね！済み シェア

ハフィントンポスト日本版はTwitterでも情報発信しています。



もっと見る: [2.11 東日本大震災 工藤花](#) [2.11 東日本大震災 被災地 崩壊 石巻 石巻 崩壊 呼び戻される犠牲の震災学 金巻清 東北学院大学](#)

議論

コメント0件

[並び替え](#) [古い順](#)



コメントを追加...

Facebook Comments Plugin

[ログイン](#) | [RSS](#) | [FAQ](#) | [利用規約](#) | [個人情報保護方針](#) | [コメントガイドライン](#)

[ハフィントンポストについて](#) | [お問い合わせ](#) | [アーカイブ](#)

Copyright ©2015 The Huffington Post Japan, Ltd. All Rights Reserved.

Part of HPMG News